福岡市埋蔵文化財調査報告書第817集

羽根戸原C遺跡群 Ⅳ

HA NE DO BARU

―羽根戸原C遺跡 第５次調査―

２００４

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では開発に伴って消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行い、記録保存という形で往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成13年度に行いました羽根戸原Ｃ遺跡第５次調査の内容について報告するものです。この調査では古墳時代から奈良時代にかけての住居、掘立柱建物等が検出されるなど多くの成果を挙げることができました。今回の調査により判明した多くの事実は、この地域における歴史を考える上で大きな手がかりとなるでしょう。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において様々な御協力を戴きました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生　田　征　生

―例　　言―

・本書は福岡市教育委員会が2001年11月19日から2002年1月11日にかけて行った羽根戸原Ｃ遺跡第５次調査の報告である。調査は藏冨士寛が担当した。
・本書使用の標高は海抜高。方位は磁北である。
・本書の執筆、編集は藏冨士が行った。
・本書に関わる実測・トレースは著者の他、下原幸裕氏（福岡大学大学院生）の全面的な協力を得た。また、トレースに関しては一部米倉秀紀氏の手を煩わせた。
・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目　　次

Ⅰ　はじめに ･･ 1
　1．調査に至る経緯 ･･ 1
　2．調査の組織 ･･ 1
Ⅱ　位置と環境 ･･ 2
　1．遺跡の立地 ･･ 2
　2．羽根戸原Ｃ遺跡群について ･･････････････････････････････････ 2
Ⅲ　調査の記録 ･･ 4
　1．遺跡の状況 ･･ 4
　2．遺構・遺物 ･･ 9
　3．包含層出土の遺物 ･･ 15
Ⅳ　まとめ ･･ 22

挿図目次

図１　周辺の遺跡（1/5.000）
図２　羽根戸原C遺跡（1/6.000）
図３　調査区位置・土層（1/400・1/40）
図４　遺構配置（1/100）
図５　竪穴住居１（1/60）
図６　竪穴住居１出土遺物（1/2・1/3）
図７　竪穴住居２（1/60）
図８　竪穴住居２出土遺物（1/3）
図９　竪穴住居３（1/60）
図10　溝１・２（1/60）
図11　溝１・２出土遺物（1/60）
図12　土坑１（1/60）
図13　土坑２（1/3・1/10）
図14　ピット出土遺物（1/2,2/3,1/4）
図15　Ⅰ区包含層出土土器（1/3）
図16　Ⅱ区包含層出土土器（１）（1/3）
図17　Ⅱ区包含層出土土器（２）（1/3,1/4）
図18　Ⅲ区包含層出土土器（１）（1/3,1/4）
図19　Ⅲ区包含層出土土器（２）（1/3）
図20　Ⅳ区包含層出土土器（1/3,1/4）
図21　包含層出土の石器（2/3）

図版目次

図版１　上　Ⅰ区全景（西から）
　　中　Ⅱ区上面全景（西から）
　　下　Ⅱ区下面全景（西から）
図版２　上　Ⅲ区全景（西から）
　　中　Ⅳ区東側（東から）
　　下　Ⅳ区西側（西から）
図版３　上　竪穴住居１（北東から）
　　中　竪穴住居２（北西から）
　　下　竪穴住居３（南から）
図版４　上　溝１（北から）
　　中　土坑２（北から）
　　下　Ⅱ区遺物出土状況（北から）

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

平成13年10月11日、福岡市西区地域整備課より、羽根戸１３３５線道路改良事業に関して、埋蔵文化財の事前審査についての依頼がなされた。当該箇所は羽根戸原Ｃ遺跡の範囲内であり、第３次調査地点の隣接地でもあったことから、両者協議の結果、発掘調査による記録保存の方針を採ることになった。調査開始は、平成13年11月19日。平成14年1月11日にすべての作業を終了した。

２．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　　福岡市西区地域整備課
調査主体　　福岡市教育委員会
調査総括　　文化財部 埋蔵文化財課　課長 山崎純男　調査第１係長 山口譲治
事前審査　　文化財部 埋蔵文化財課　事前審査係長 田中寿夫　大塚紀宜　田上勇一郎
庶務担当　　宮川英彦
調査担当　　藏冨士寛
調査作業　　井上忠久　井上ムツ子　加島定次郎　西嶋利規　西島マツ子　西嶋ムラ子　西嶋洋子
　　西畑盛行　平田千鶴子　宮原邦江　脇坂チカ　脇坂信重　脇坂ミサヲ
整理作業　　柴田加津子　萩本恵子　日名子節子

遺　跡　名	羽根戸原Ｃ遺跡　第５次調査				
遺跡調査番号	０１３８		遺　跡　略　号	ＨＮＣ-５	
地　　番	西区羽根戸５７６-３他		分布地図記号	戸切　９２	
開　発　面　積	３００㎡	調査対象面積	３００㎡	調査面積	１８７㎡
調　査　期　間	２００１.１１.１９～２００２.１.１１				

Ⅱ　位置と環境

１．遺跡の立地

福岡平野と糸島平野の半ばに位置する早良平野は、東部を油山から延びる飯倉丘陵、西部を長垂丘陵によってそれぞれ画される。早良平野の中央部には室見川が流れ、この室見川と支流であるいくつかの小河川は、その開析作用により広大な扇状地を形成し、この扇状地には数多くの遺跡が営まれている（図１）。早良平野の西部に位置し、背振山山系から延びる山塊の一つである飯盛山は、東部に扇状地が広がっているが、羽根戸原遺跡群はこのような扇状地に展開する複合遺跡である。遺跡の範囲は東西約１ｋｍ、南北500mに渡る広大なもので、現在Ａ～Ｃの３つに分けて理解がなされている。今回調査を行ったのはその内のＣ遺跡で、その南側に隣接して太田遺跡、日向川を挟んで更に南側では弥生時代の甕棺墓・木棺墓の調査で著名な吉武遺跡が存在する。太田遺跡ではこれまで３次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代後期の集落や甕棺墓、そして古墳時代前期、中世の集落等が検出されている。また、西側の飯盛山山麓一帯には羽根戸古墳群等、市内でも有数の古墳群が形成している。

２．羽根戸原Ｃ遺跡群について

羽根戸原Ｃ遺跡では過去、４次にわたる発掘調査がなされていた（図２）。その概要は以下の通りである。

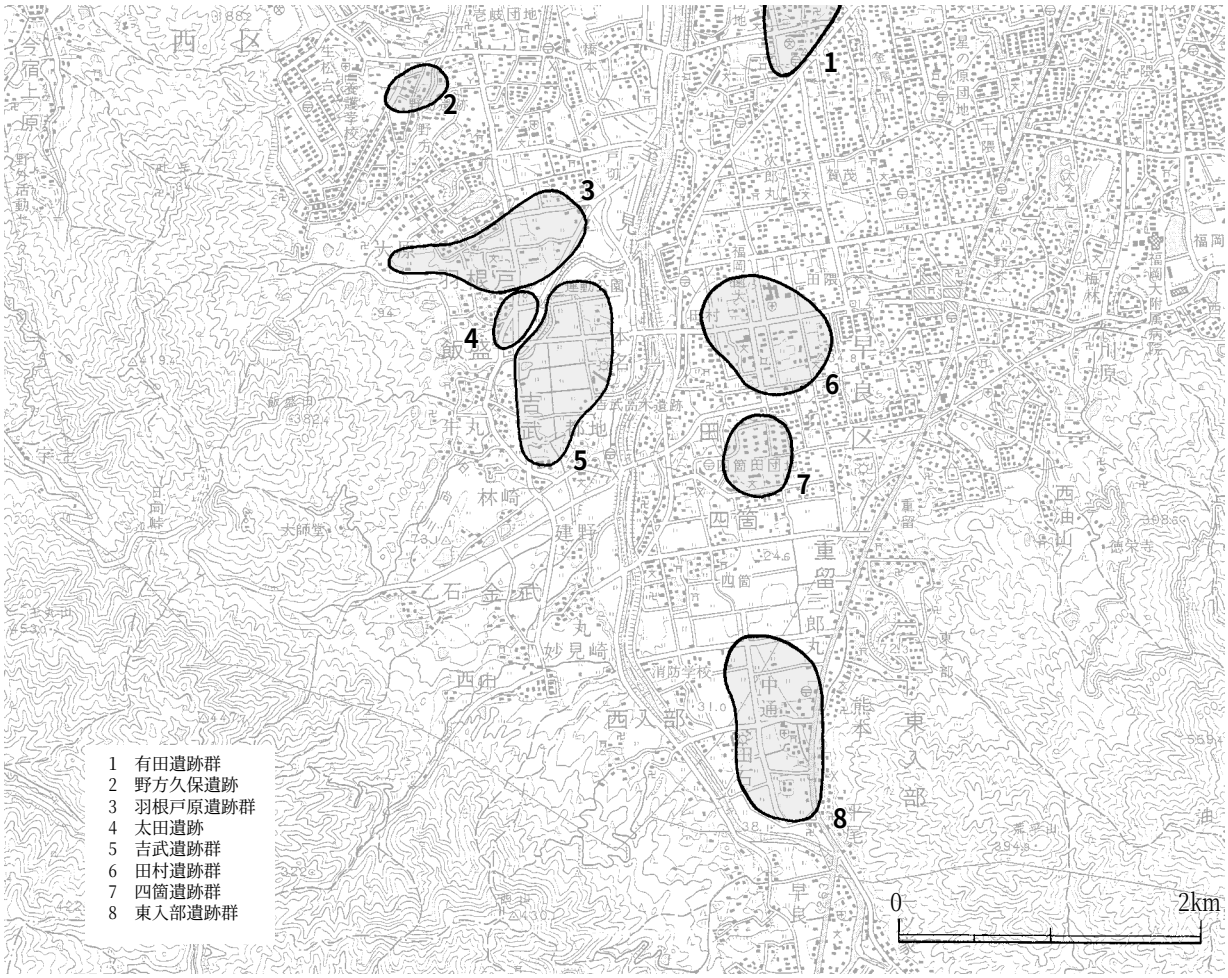


図１　周辺の遺跡（1/5,000）

第１次調査（1983）

農業用水路付替に伴う調査で、調査面積は道路に沿った100㎡ほど。弥生時代中・後期、中世等の遺物が出土しているようだ（吉武編1988）。

第２次調査（1984）

中学校建設に伴う調査で、調査面積は24.000㎡。旧石器時代包含層、弥生時代中期中葉の甕棺墓、古墳時代後期の竪穴住居、６～11世紀の掘立柱建物、製鉄炉等が検出されている（小林編1986）。

第３次調査（1985～1986）

道路建設に伴う調査で、調査面積は1.567㎡。今回調査した第５次調査の隣接地に当たる。古墳時代の竪穴住居、古墳～古代の掘立柱建物、溝等が検出されている（横山編1988）。

第４次調査（1985）

道路建設に伴う調査で、調査面積は1.562㎡。弥生時代中・後期の竪穴住居、掘立柱建物、土坑等を検出している（吉武編1988）。

文献

小林義彦編1986『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集

吉武学編1988『羽根戸原Ｃ遺跡群Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第188集

横山邦継編1988『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集

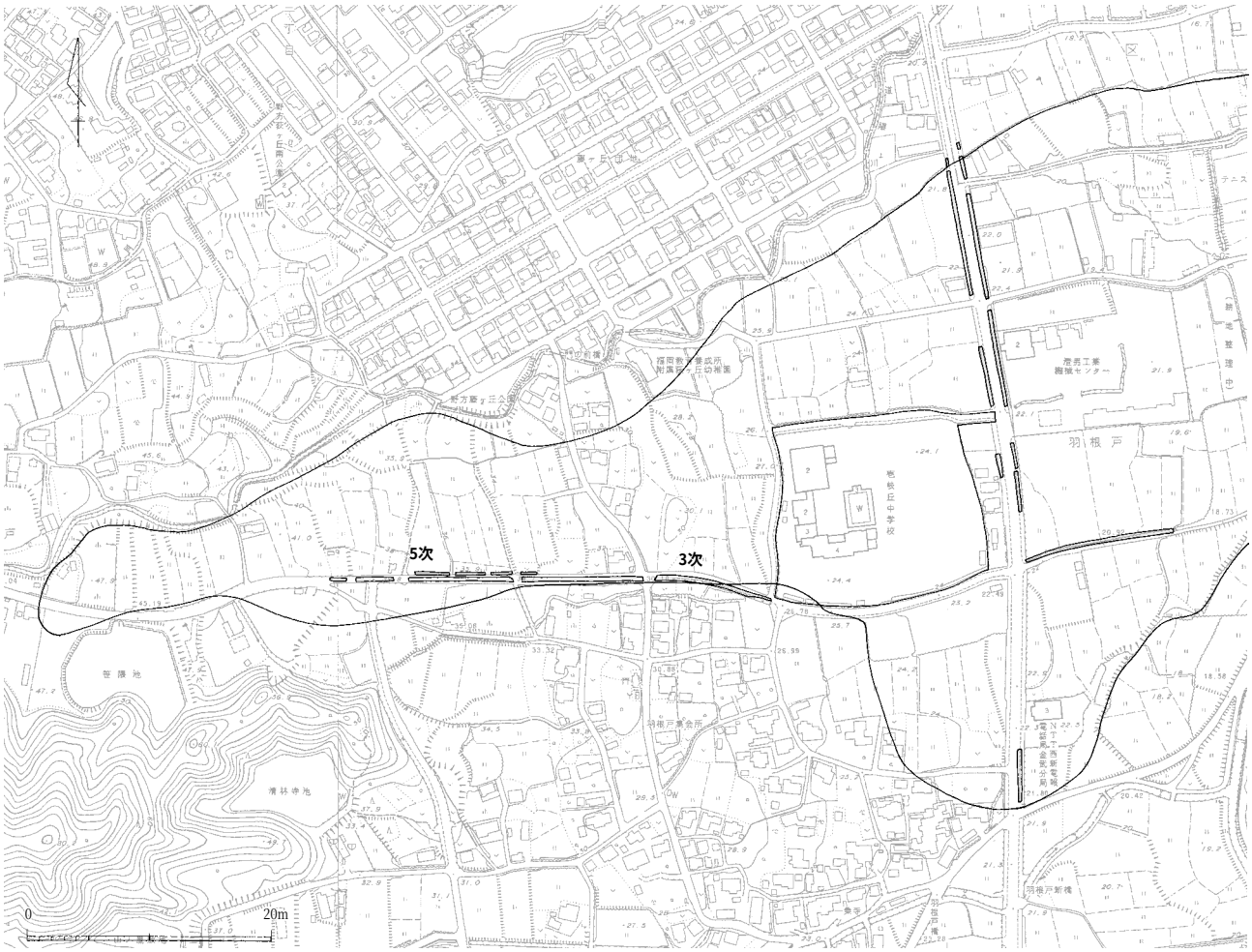


図２　羽根戸原C遺跡（1/6,000）

Ⅲ　調査の記録

１．遺跡の状況

先にも述べたように、今次調査の原因は市道の拡幅であり、したがって調査区も幅２m、長さ83mの狭長なものとなった（図３）。狭い調査区故に柱穴等、遺構相互の関係把握が十分にできなかった。また、水田の畦部分を残す形での調査となったため、調査区すべてにおける層位的な関係把握も困難を伴った。

調査では分割された調査区を便宜的に東からⅠ～Ⅳ区とした（図４）。その位置、そして層位的な関係を示したものが図３である。これに示したように、Ⅰ区では遺物包含層である褐色土上で遺構検出を行い、Ⅲ・Ⅳ区では褐色土上で遺構を把握することができず、地山である黄褐色砂層まで掘り下げを行って遺構検出をせざるを得なかった。Ⅱ区では褐色土中に黒褐色土層を挟んでおり、その直下で遺構を見ることができた。したがって今次調査では本来計２～３の遺構面が存在したことになるだろう。その把握ができた調査であるとはとても言い難いが、まず以下では各調査区における概要を記し、いささかでもその責を果たすことにしたい。

Ⅰ区

Ⅰ区は客土およびにぶい黄褐色土層下の褐色土層上面で遺構を検出した。西隅は攪乱を受ける。中央やや西よりに溝１を検出したほかは、すべてピットである。径50～60㎝程のピットは北寄りに集中して存在する。白磁等、陶磁器類の出土はこの区に集中している。

Ⅱ区

Ⅱ区は黒褐色土下の褐色土層上（上面）、および地山である黄褐色土層上（下面）の計２面で遺構を検出した。上面ではやや大きめ（径60～80㎝ほど）のピットや土坑があり、下面ではピットの他に竪穴住居１を検出した。尚、Ⅱ区におけるピットには次のような特徴的な埋土を有するものが存在する。

埋土Ａ：暗褐色（Hue7.5YR5/6）土。明褐色土がブロック状に混入する。しまりはなく、炭化物を含む。
埋土Ｂ：褐色（Hue10YR4/4）土。シルト質だが、若干の砂質土が混じる。ややしまりあり。
埋土Ｃ：暗褐色土（Hue10YR4/6）土。砂質土を多く含み、埋土Ｂに比して暗い。

埋土Ａのピットは上面より掘り込まれているもので、上面では検出されない埋土Ｂ・Ｃのピットに先行するものである。

Ⅲ区

Ⅲ区は地山である黄褐色土上で遺構を検出した。他区に比して、遺構の密度は薄い。ピットや不定土坑が存在し、調査区東隅には浅い溝（溝２）が存在する。

Ⅳ区

Ⅳ区もⅢ区と同じく黄褐色土上で遺構を検出した。西半で遺構が濃く、東側へ行くにしたがって遺構が薄くなる。ピットの他に竪穴住居２・３を検出した。埋土Ａを含むピットがいくつか存在しており、調査時に重機によって掘り下げてしまったが、精査を行えばⅡ区上面において検出した遺構と同時期の遺構面が検出できた可能性も否定できない。

次に各区で検出した主な遺構について、所見を述べることにしたい。

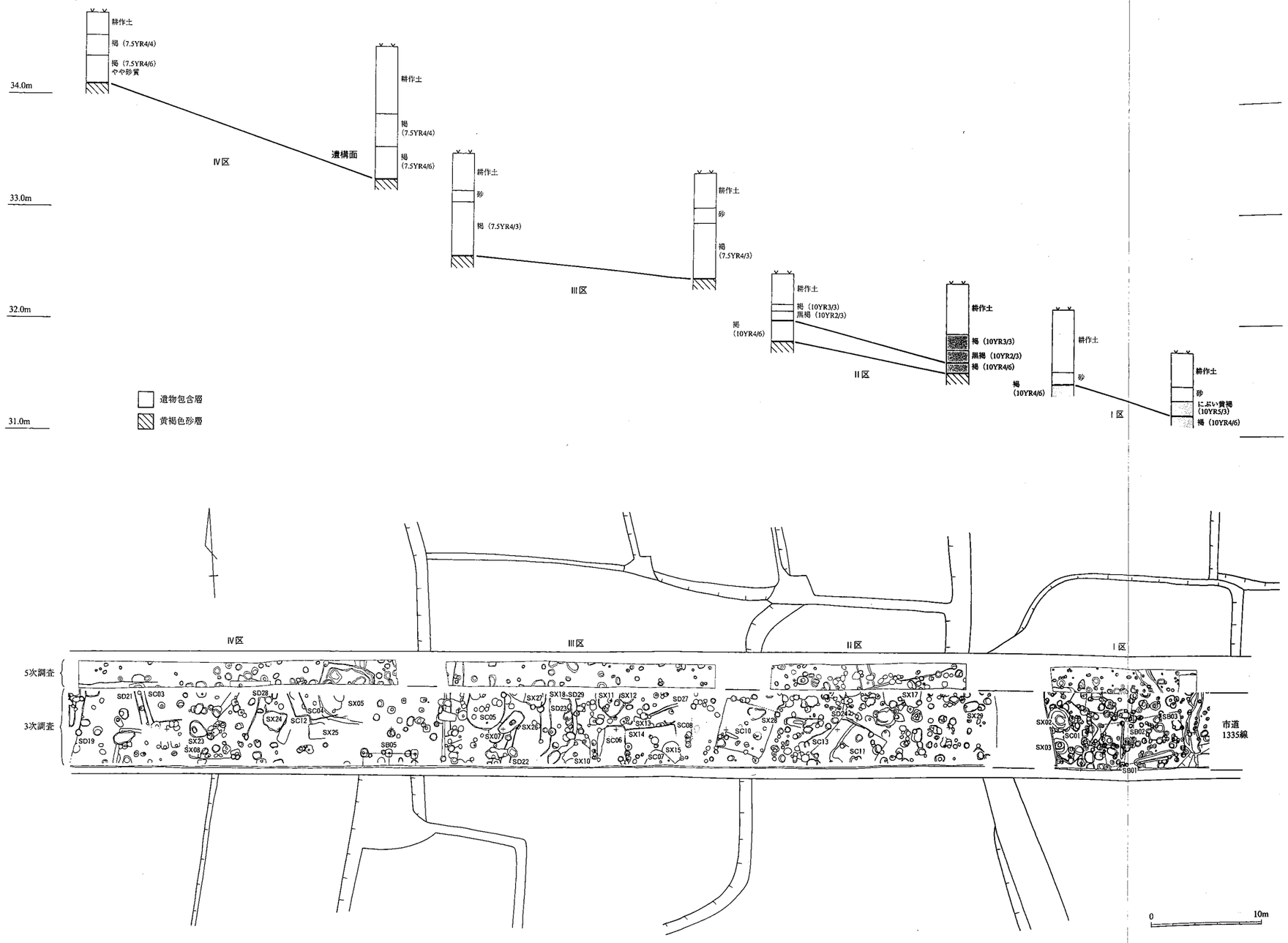


図３　調査区位置・土層（1/400・1/40）

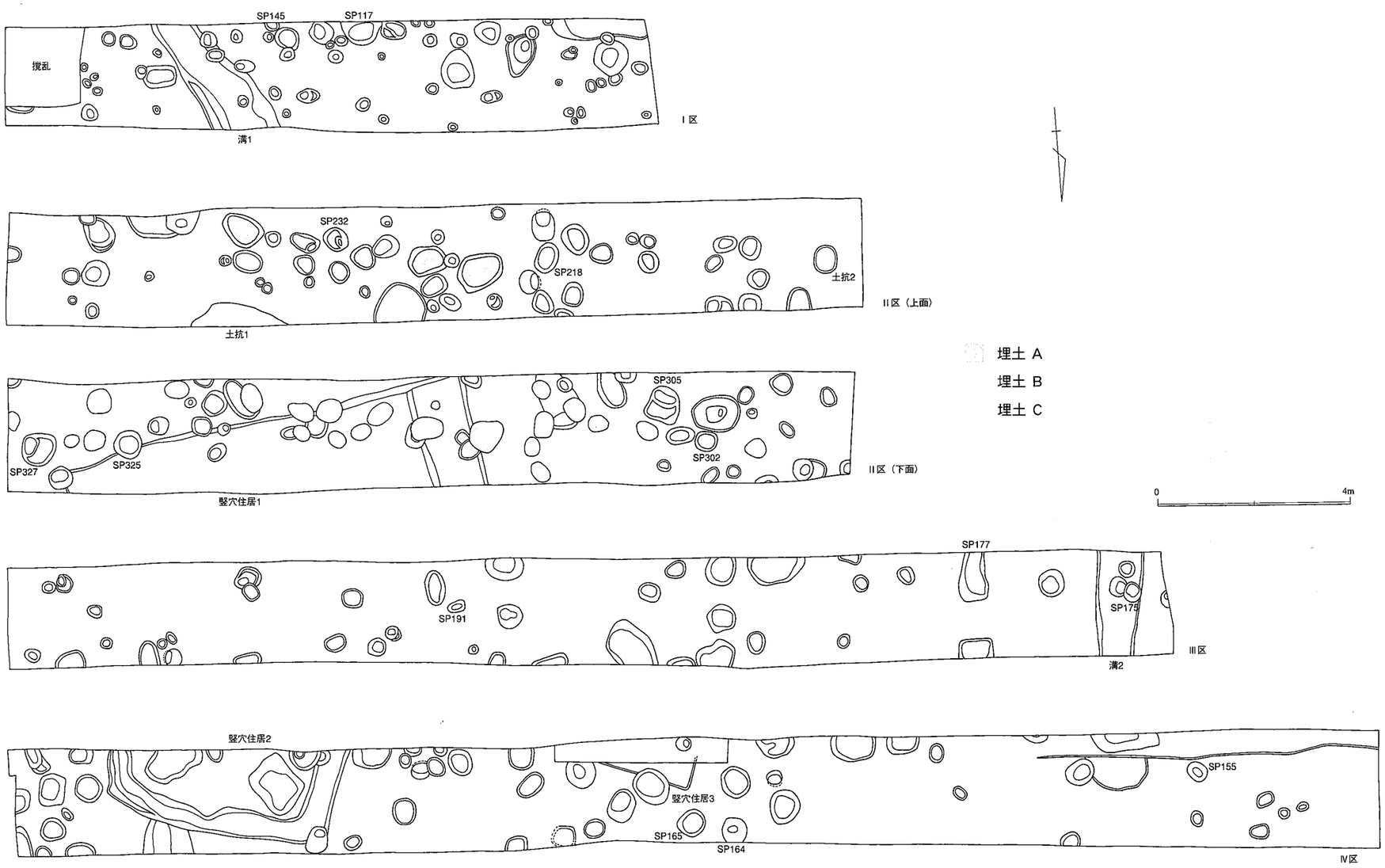

SP145
SP117
撹乱
溝1
I区
SP232
SP218
土抗2
土抗1
II区（上面）
埋土 A
埋土 B
埋土 C
SP305
SP302
SP327
SP325
竪穴住居1
II区（下面）
0
4m
SP177
SP191
SP175
溝2
III区
竪穴住居2
竪穴住居3
SP155
SP165
SP164
IV区

図4　遺構配置（1/100）

２．遺構と遺物

今回の調査では竪穴住居３、溝２、土坑２を検出した。調査区自体が狭長なものであったため、遺構全体の内容把握が難しく、認識し切れていない遺構の存在は否定できない。以下では、それぞれの遺構について所見を述べることにしたい。

竪穴住居１（図５）

竪穴住居１はⅡ区第２面で検出された。住居の一部が明らかとなっているに過ぎないが、南壁の長さが8.5mを測る大形の方形住居である。住居は深さ10～20㎝程しか無く、遺存状況は悪い。東壁には高さ10㎝程のベッド状遺構がある。これは地山の削り出しによるものである。住居の埋土は褐色土（Hue10YR4/4）でピットの埋土Ｂに類似するが、この住居に確実に伴うピットは不明。周辺のピットの多くはこの住居を切り込んであり、大半のピットは住居に伴うものではないだろう。

出土遺物（図６）

住居埋土中の遺物はその大半が細片で、しかも住居自身の遺存状況を考えれば上部よりの混入の可能性も高く、確実にこの住居に伴うものとはいえない。１は二重口縁壷の口縁部である。口径（復元）は22.2㎝を測る。２は甕胴～頸部片である。外器面はハケ目調整、内器面には斜め方向のケズリを施す。外器面の肩部には沈線が１条波状に巡る。３は甑の把手。４は台付甕の底部片である。外器面にはハケ目調整を施し、部分的に煤が付着する。５は滑石製の小玉である。外形0.8㎝。住居埋土の上層部分より出土。

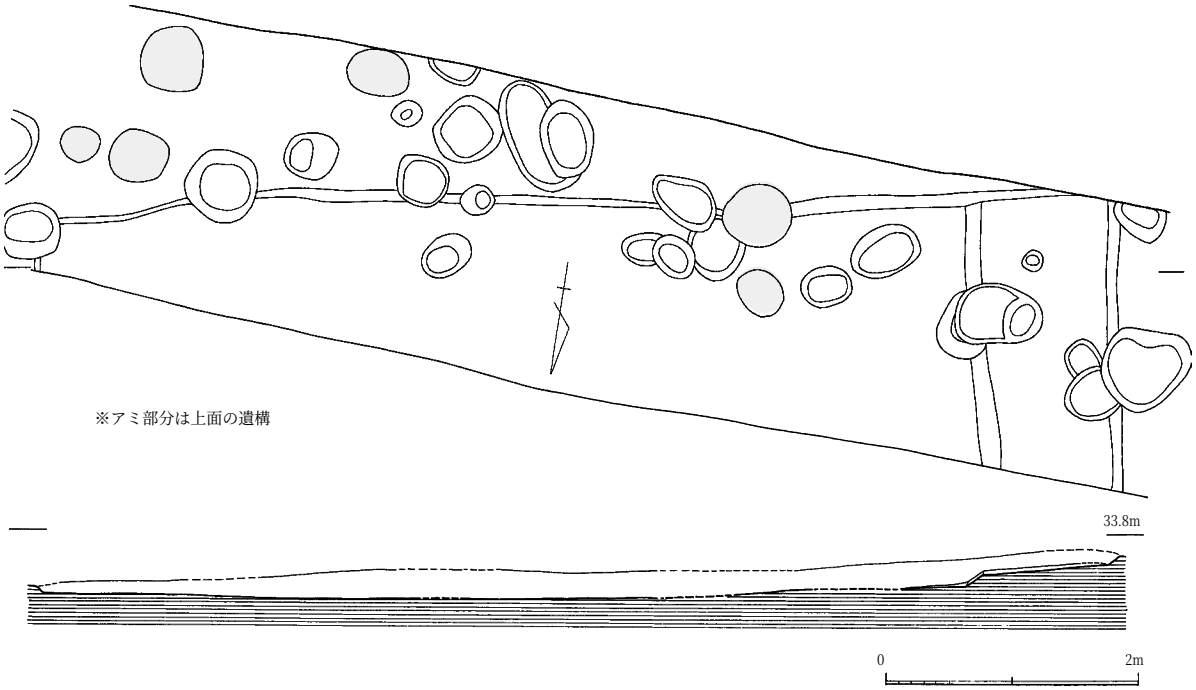


図５　竪穴住居１（1/60）

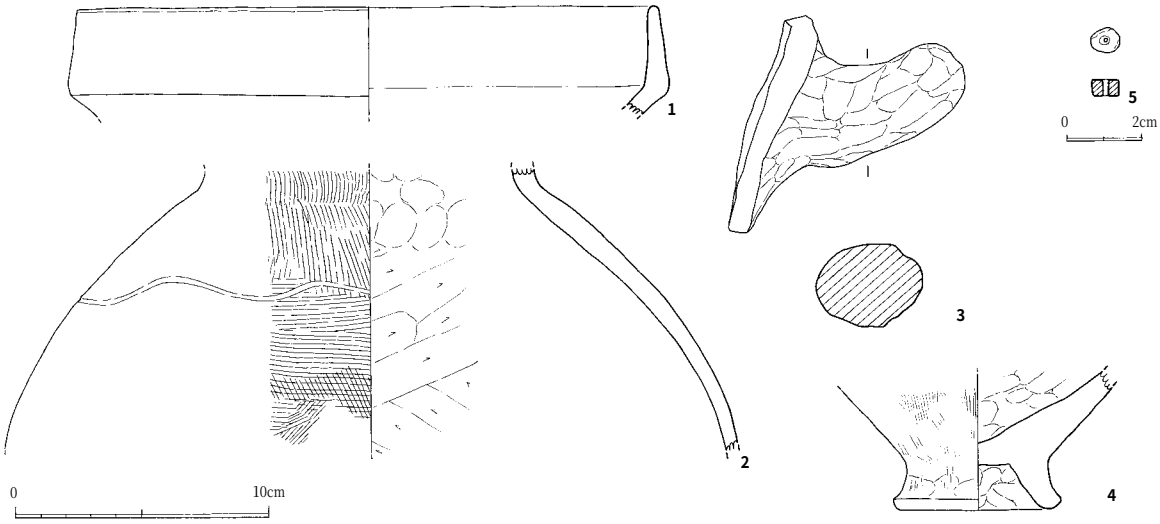


図６　竪穴住居１出土遺物（1/2,1/3）

竪穴住居２（図７）

竪穴住居２はⅣ区の黄褐色土上で検出された。検出部分の状況をみると、一辺4.5m程の方形住居であるといえるだろう。住居の周囲には深さ10㎝程の壁溝が巡っている。この住居の遺存状況も悪く西側では深さ20㎝程の掘り込みが残っているが、西側では住居床面と遺構検出面のレベル差はほとんど存在していない。周辺のピットはすべて切り合っているもので、この住居に伴うものではない。

尚、住居北側に深さ10～20㎝程の溝が存在しているが、埋土の状況等をみれば、これは住居２と切り合った他住居の壁溝部分であった可能性がある。

出土遺物（図８）

住居壁溝部分を中心にして若干量の遺物が出土している。ここでは図化に耐えうる資料についてのみ述べることにする。１は須恵器杯蓋の天井部片である。天井部には、丁寧な回転ヘラケズリを施す。

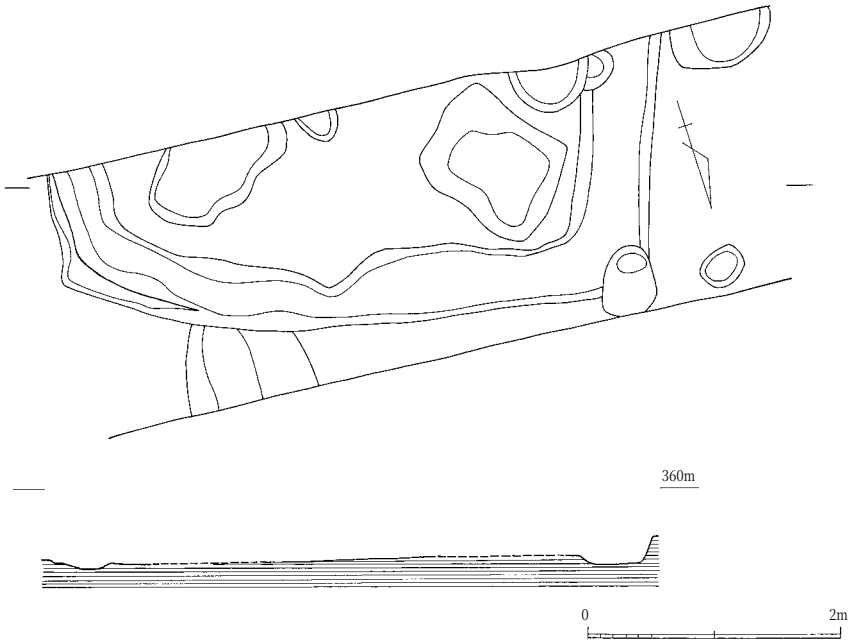


図７　竪穴住居２（1/60）

２は須恵器蓋身である。立ち上がりは低く、やや直立気味である。焼成は良好で、青灰～暗赤褐色を呈する。３は平瓶の口縁部片である。口径（復元）は５㎝。

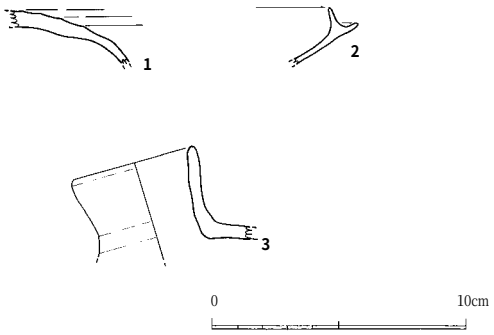


図８　竪穴住居２出土遺物（1/3）

竪穴住居３（図９）

竪穴住居３はⅣ区の黄褐色土上、竪穴住居２の東側で検出された。南側の大半を攪乱により破壊され、隅部をごくわずかに残すのみである。はっきりとした掘り込みを有し、隅角を明確に留めていることから、ここでは竪穴住居と判断した。住居の掘り込みは30㎝程を測る。出土遺物は土器の細片であり、図化に耐えうるものはない。

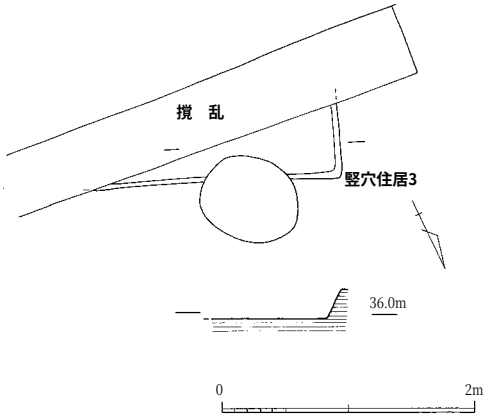


図９　竪穴住居３（1/60）

溝１（図10）

Ⅰ区の褐色土上で検出されたものである。幅1.2～0.8m、深さ40～60㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、しっかりとした堀方を有している。尚、溝内の上層部分からは多くの礫が検出された。

出土遺物（図11）

遺物は溝内の上部、主として１～３層中より出土している。コンテナ１箱程の遺物が出土しているが、細片が多く図化に耐えるものは以外に少ない。１は二重口縁壷の口縁部である。摩耗が激しく調整は不明。２は器台である。口縁部はわずかに肥厚する。外器面にはハケ目調整の痕跡がわずかに残る。

溝２（図10）

溝２はⅢ区黄褐色土上で検出された。幅1.0～0.8m、深さは浅く、10㎝程度しかない。

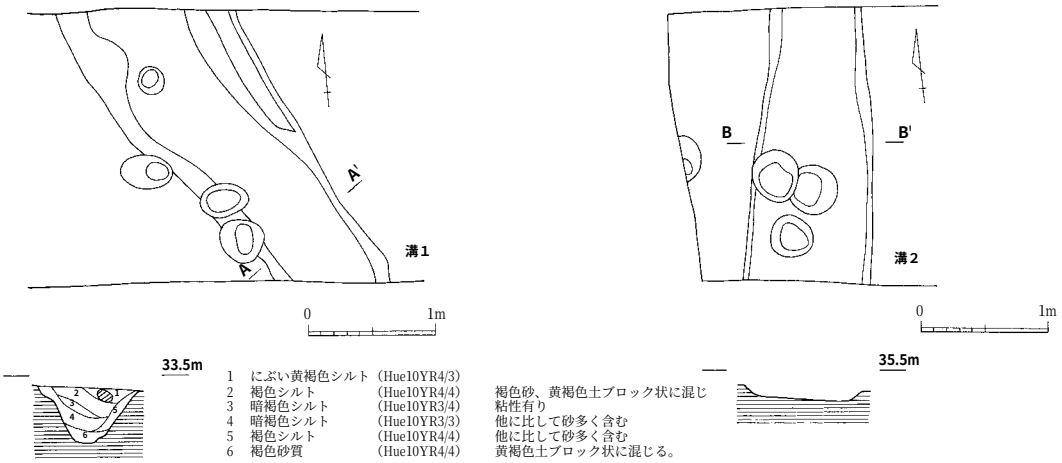


図10　溝1・2（1/60）

出土遺物（図11）

出土遺物もごくわずかで、土器の細片が主体をなす。３は高杯脚部である。摩耗が激しく調整は不明である。４は台付甕の底部である。台部は半ばが残るのみである。内・外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に認められる。

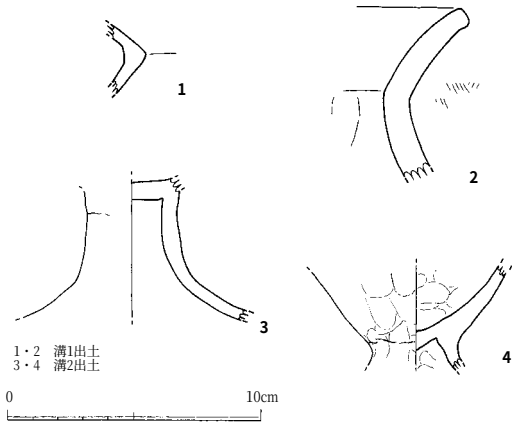


図11　溝１・２出土遺物（1/60）

土坑１（図12）

土坑１はⅡ区第１面上で、調査区際に一部が検出された。深さは30㎝程を測り、壁面の立ち上がりは比較的急で、しっかりとしている。

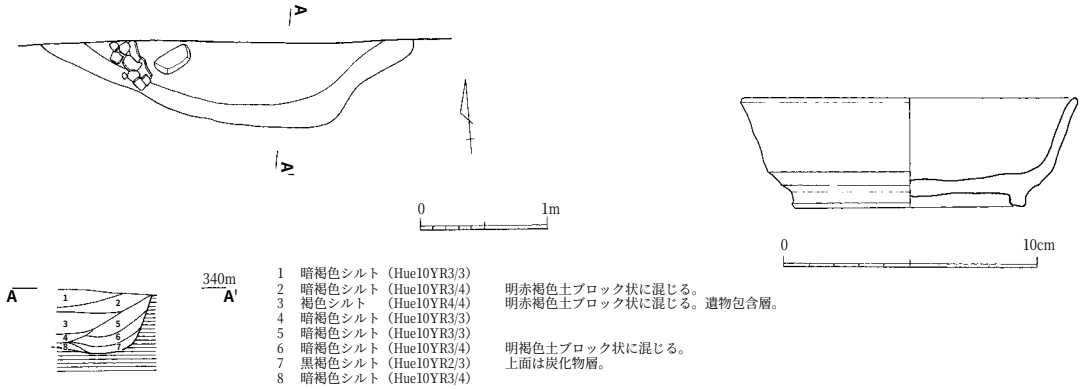


図12　土坑１（1/3,1/60）

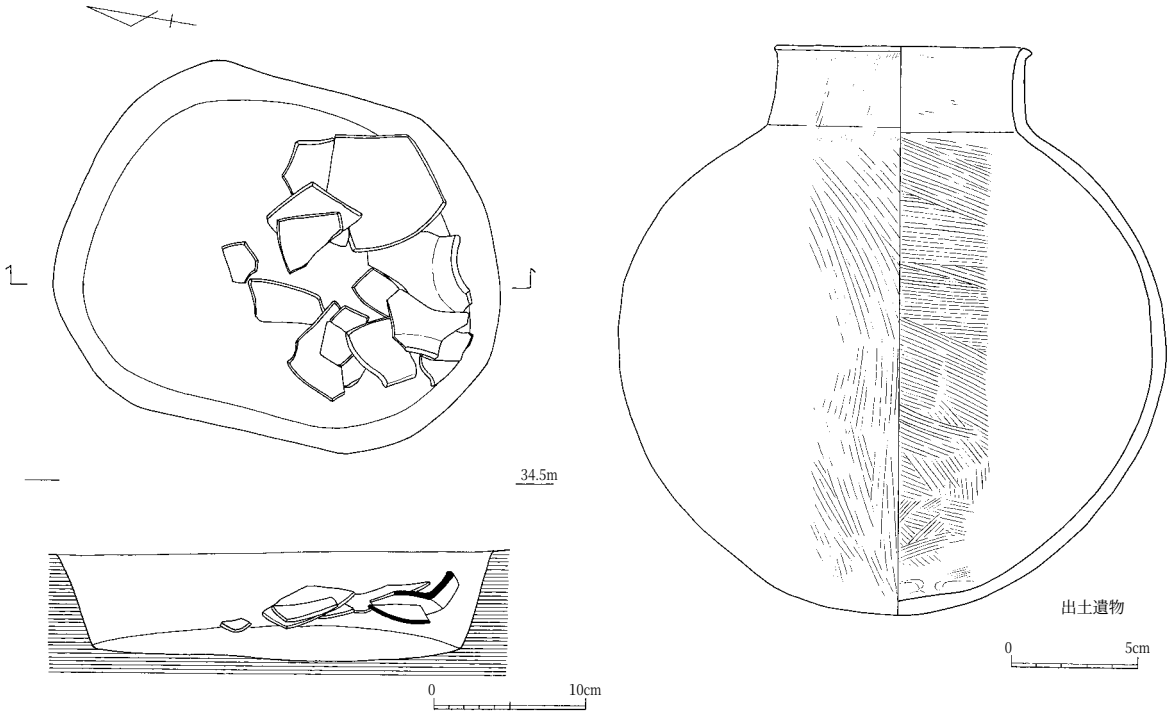


図13　土坑２（1/3,1/10）

土坑内部には明褐色土のブロックが、互層をなして堆積している。また、７層の上面には炭化物がまとまって検出された。

出土遺物

遺物の出土は３層付近に集中している。１は台付椀であり、2/3程が遺存している。口径13.1㎝、器高4.4㎝を測る。

土坑２（図13）

土坑２は２区第１面上で検出した。径は30㎝、深さは10㎝に満たない。内部からは直口壷が出土した。

出土遺物

直口壷はほぼ完形で、口径9.7㎝、頸部径10.2㎝、胴部最大径21.5㎝、器高22.5㎝を測る。
口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内・外面ともハケ目調整を施す。

ピット群

各調査区では多くのピットを検出した。当然掘立柱建物等何らかの建築物の柱穴であることが多いのだが、調査範囲が極めて限定されたものであったため、建物を特定するには至っていない。Ⅱ区における遺跡の状況を述べる際に指摘したように（ｐ.4参照）、ピットの所属時期は少なくとも３時期に渡ることが判明している。

出土遺物（図14）

ピット出土の遺物は細片が多く、図化に耐えるものは少ない。図14では図化に耐える資料のみを示している。１はミニチュア土器で、鉢形を呈するものである。全面にユビオサエの痕跡が残り、手ずくねによる整形であることがわかる。口径8.8㎝、器高4.2㎝を測る。ＳＰ155からの出土。２～６は高杯基部から脚部の破片である。２は摩滅がひどいが、外器面にタテハケの後にヘラミガキを施していることがわかる。円孔を三方向から施す。ＳＰ305からの出土している。３は外器面に丁寧なヘラミガキを施す。基部径5.2㎝を測る。ＳＰ302からの出土している。４は外器面に細かいハケメ調整の後に縦方向のヘラミガキを行う。円孔を三方向から施す。ＳＰ177からの出土している。５は摩滅が激しく外器面の調整は不明。ＳＰ325からの出土している。６は外器面にタテハケが認められる。基部径3.6㎝を測る。ＳＰ164からの出土している。７・８は甕である。７は甕口縁部片で、胴部には強いはりを有し、口頸部は「く」の字に屈曲する。摩耗が激しく外器面の調整は不明。内器面にはハケ目調整を施している。口径18.6㎝を測る。ＳＰ117からの出土。８は全形を窺うことのできる個体である。長胴で胴部があまり張り出さない。口頸部は「く」の字に屈曲する。口径16.7㎝、器高32.3㎝、頸部径15.6㎝、胴部最大径21.2㎝を測る。ＳＰ145からの出土。９・10は須恵器蓋杯の杯身である。いずれも口縁部に打ち欠き痕がある。９は口径14.5㎝（復元）を測る。立ち上がりは短く、やや直立気味である。ＳＰ165からの出土。10は口径10.8㎝（復元）、器高3.3㎝を測る。立ち上がりはごく短い。ＳＰ218からの出土。底部にはヘラ記号を有する。11は白磁であり、口径9.2㎝（復元）、器高3.2㎝を測る。ＳＰ191からの出土。12は管玉である。半ばを欠損している。碧玉製で、中央やや上よりの位置に周囲を半周する溝を穿っている。長さ2.4㎝、幅1.0㎝を測る。片側からの穿孔である。ＳＰ327からの出土。13は剥片、14は石核である。13はＳＰ175、14はＳＰ232より出土し、いずれも黒曜石製。15は敲石。ＳＰ305より出土している。

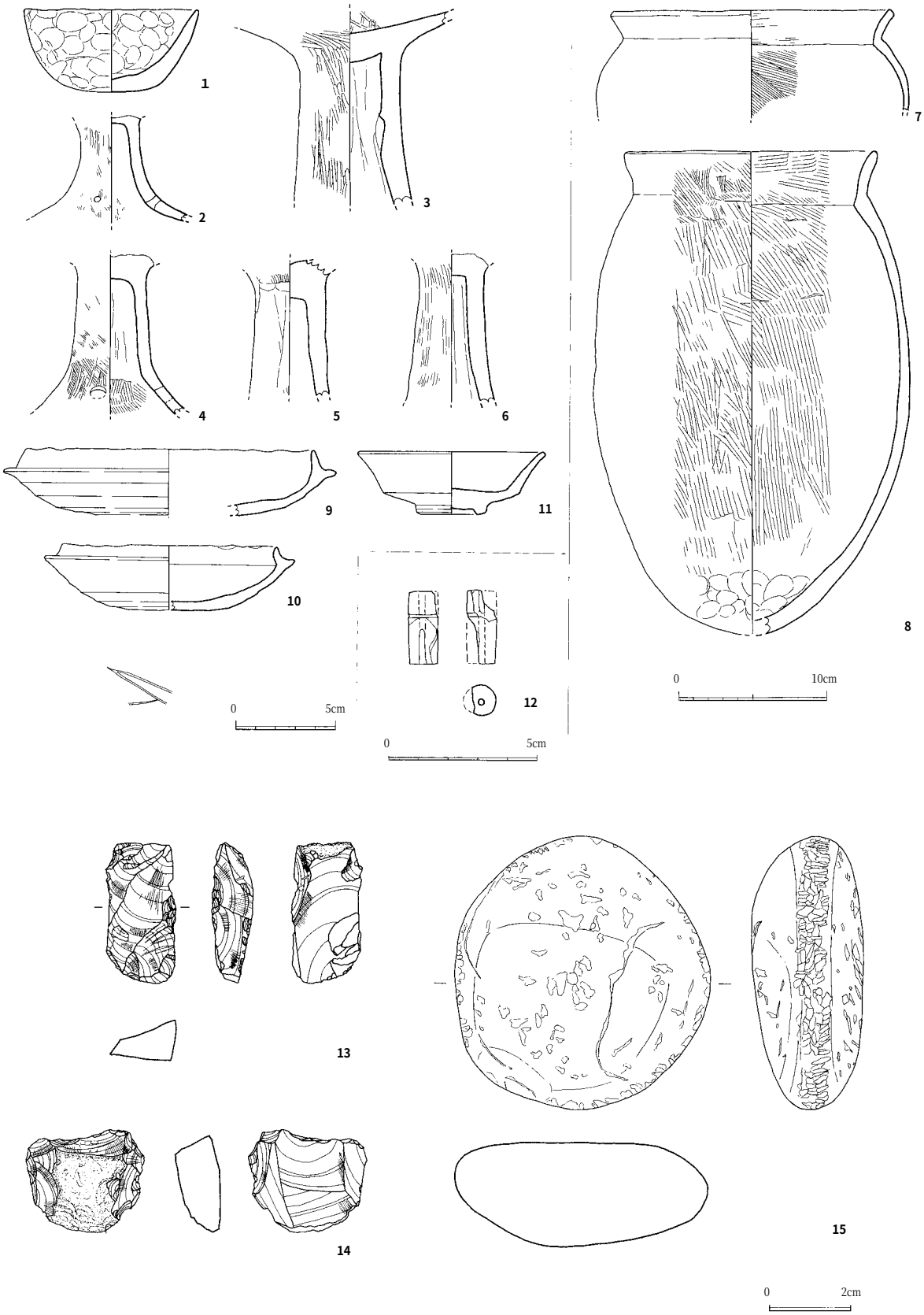


図14　ピット出土の遺物（2/3,1/2,1/4）

３．包含層出土の遺物

包含層からは多くの遺物が出土している。今回の調査では狭長な調査区となっていること、調査時の不手際で、検出面の設定が各区ごとにまちまちになっていることから、各区ごとの包含層出土の遺物をまとめ、その状況を記していくことにしたい。

Ⅰ区包含層（図15）

Ⅰ区包含層出土の遺物は量的にあまり多いものではない。１は甑の把手である。２・３は高杯の基部から杯部にかけての破片である。２は内面にヘラミガキを施す。３は杯の半ばでわずかに段をなす。摩耗が激しいが、内・外面ともにハケ目調整の痕跡が残る。口径18.3cmを測る。４～７は甕等の底部である。すべて平底を呈する。４は外器面にハケ目調整が認められる。内器面にはユビオサエの痕跡が残る。底径3.2cmを測る。５は摩耗がひどく外器面にわずかにハケ目調整が認められるのみである。底径3.1cmを測る。６は外器面にハケ目調整が認められる。底径6.4cmを測る。７は外器面にタタキの痕跡を残す。底径7.3cmを測る。内器面及び外器面の底部近くにユビオサエの痕跡が残る。８は須恵器皿である。底部には回転ヘラケズリを施す。口径（復元）18.8cmを測る。

Ⅱ区包含層（図16・17）

Ⅱ区の包含層からは多くの遺物が出土している。図16は丸底壷（１・２）、台付鉢（３）、高杯（４～８）、二重口縁壷（９）、鉢（10）、器台（11～15）を示す。１は口径14.6cmを測る。２は内器面に横方向のヘラミガキを施す。口径14.1cm（復元）を測る。３はほぼ完形である。内・外器面共にハケメ調整を施す。口径16.8cm、器高12.9cmを測る。４～６の高杯杯部は途中に明確な屈曲部を持たず、杯部の半ばに弱い段が認められるのみである。４は内・外器面にハケ目調整の後、ヘラミガキを施す。口径21.4cm（復元）を測る。５は摩耗がひどく、ハケメ調整が部分的に認められるのみである。口径25.6cm（復元）を測る。６は明確に調整痕が残る個体である。内・外器面に横・斜め方向のハケメ調整を行った後、縦方向のヘラミガキを施す。口径26.6cm（復元）を測る。７は基部片である。基部径3.3cmを測る。８は脚部片である。外器面には縦方向のヘラミガキ、脚内面にはハケメ調整を行う。脚の屈曲部下に円孔を施す。底径14.0cmを測る。９は口縁部片で、屈曲部外面には刻み目を

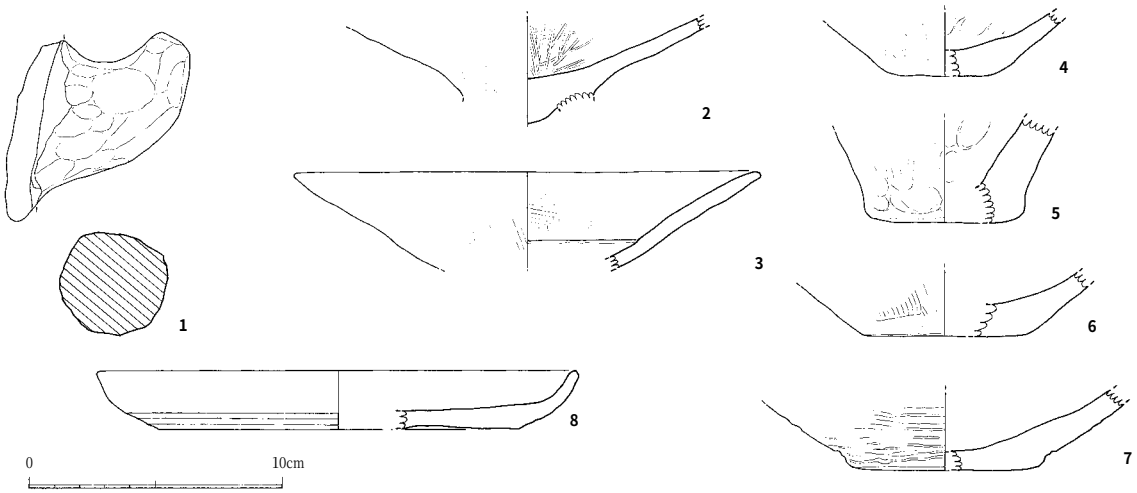


図15　Ⅰ区包含層出土土器（1/3）

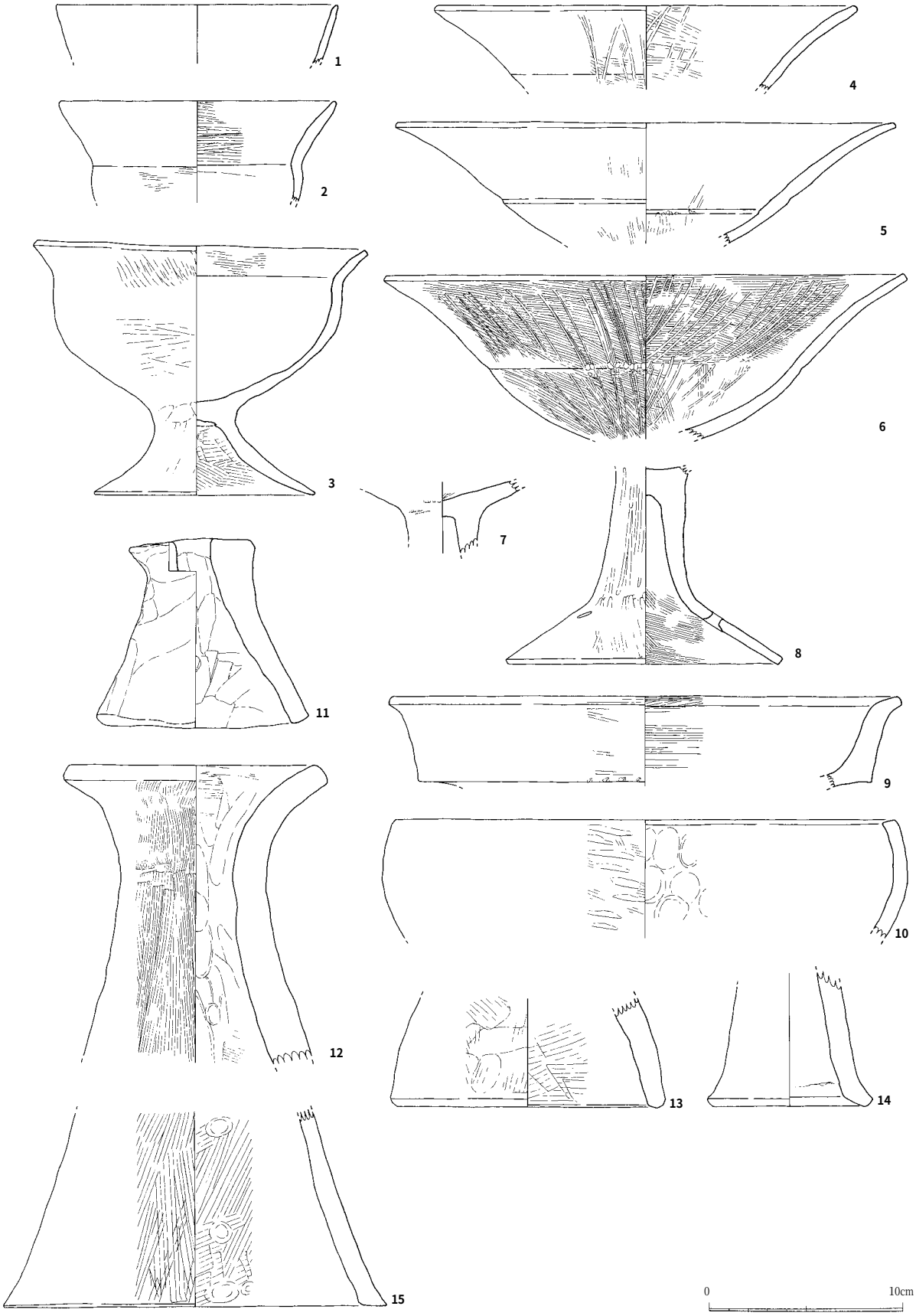


図16　Ⅱ区包含層出土土器（1）（1/3）

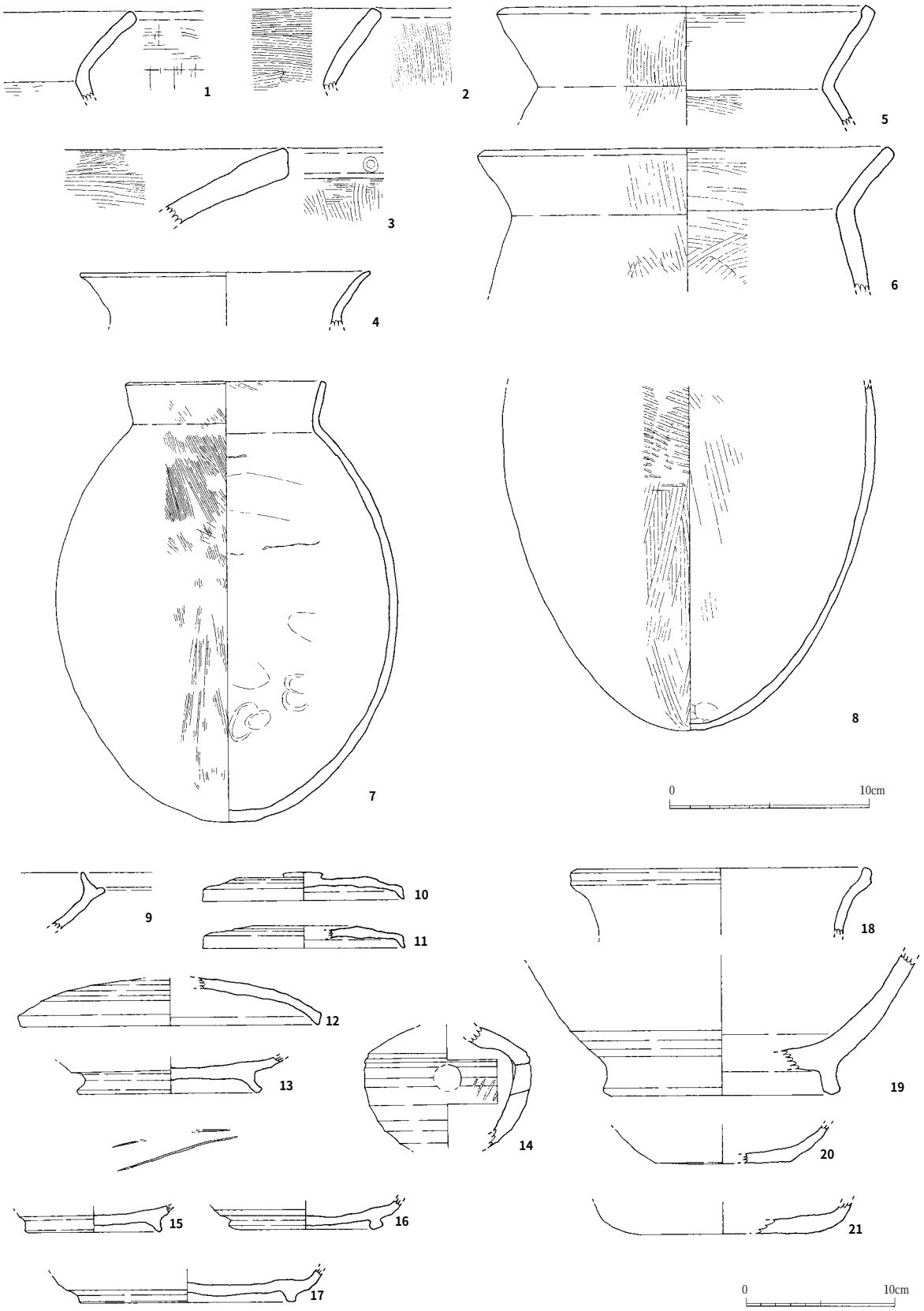


図17　Ⅱ区包含層出土土器（2）（1/3,1/4）

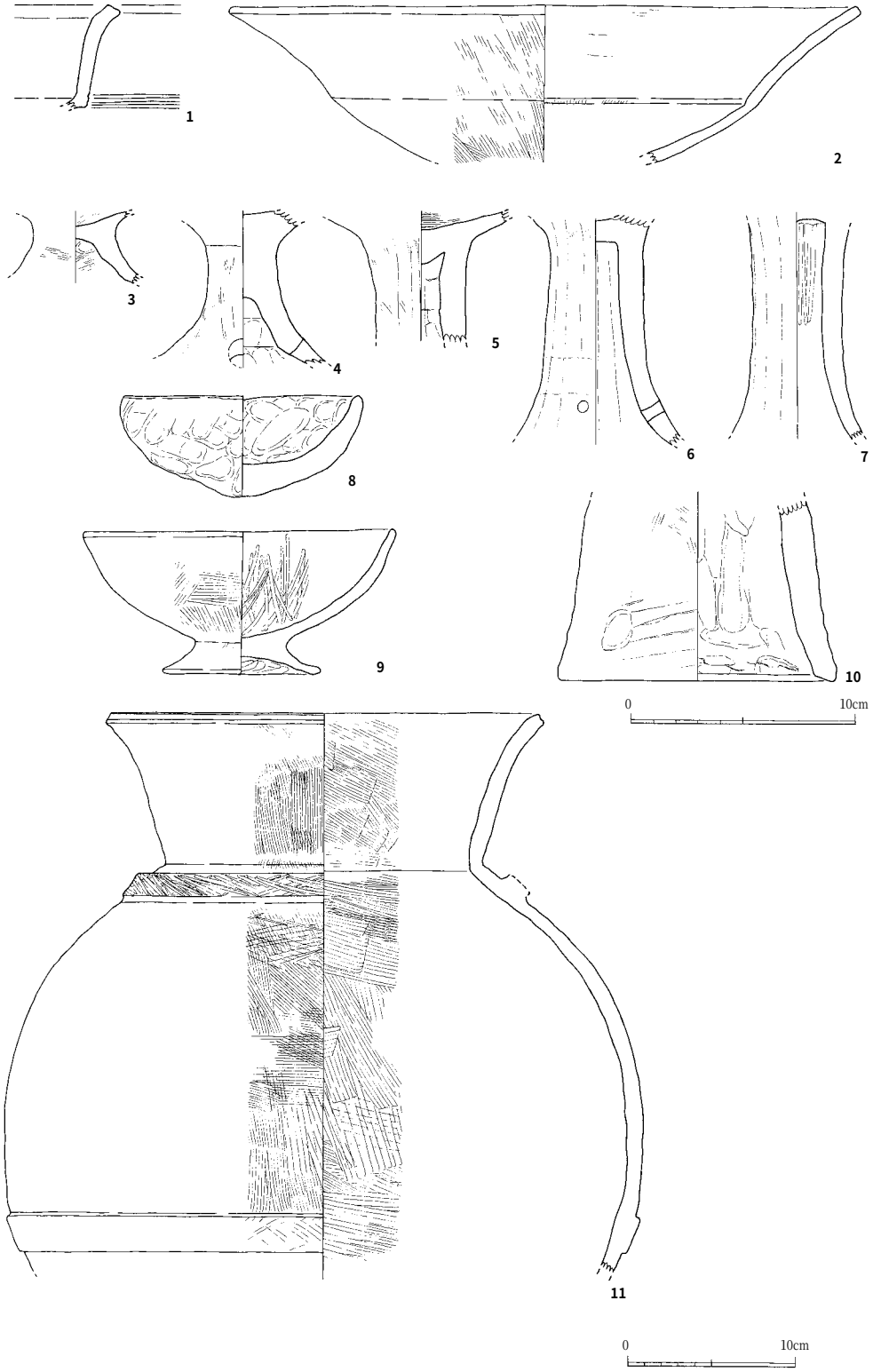


図18　Ⅲ区包含層出土土器（1）（1/3,1/4）

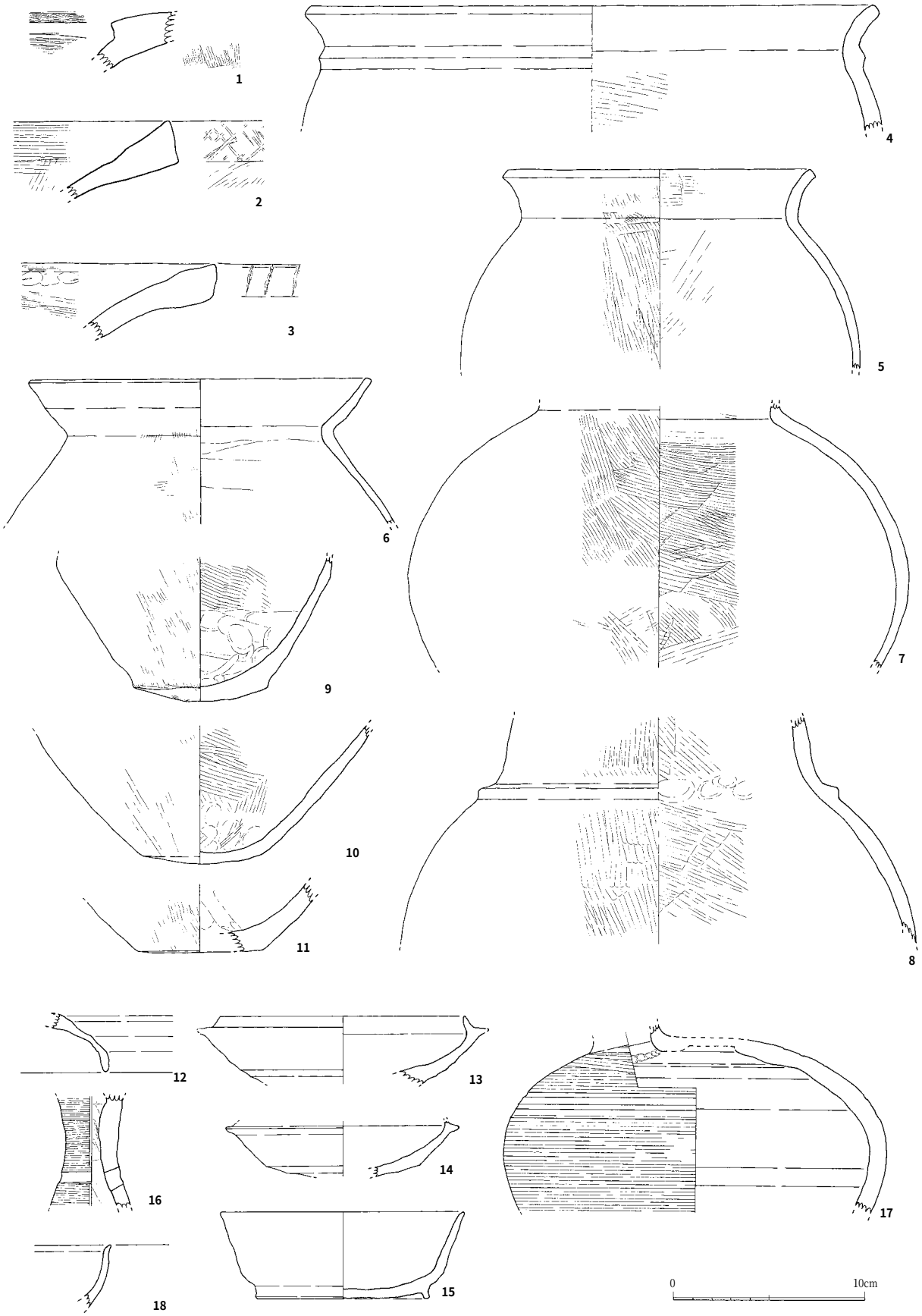


図19　Ⅲ区包含層出土土器（2）（1/3）

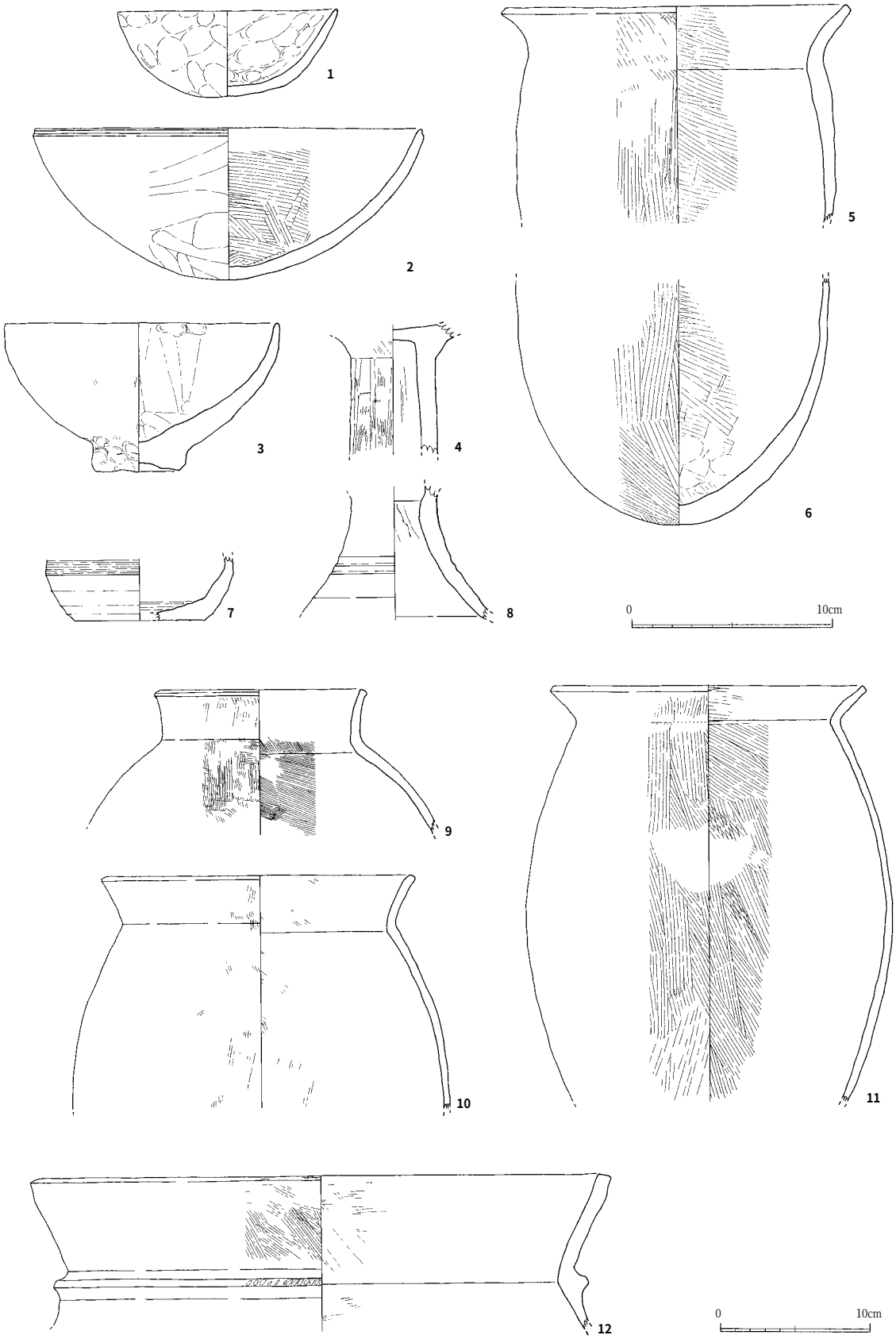


図20　Ⅳ区包含層出土土器（1/3,1/4）

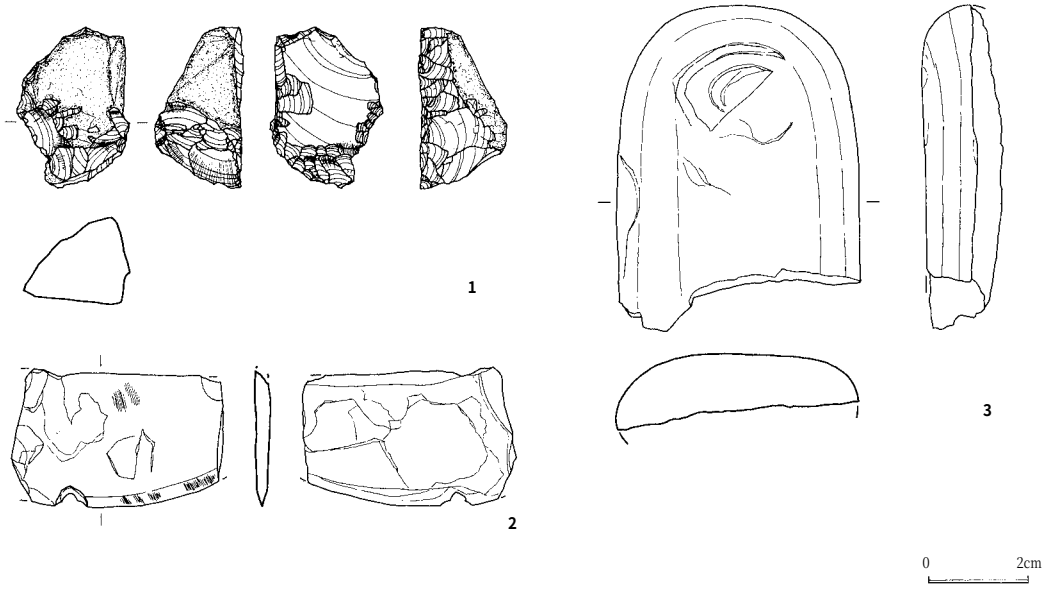


図21　包含層出土の石器（2/3）

施す。口径（復元）26.5cmを測る。10は口縁部片で、口縁端部は平坦で、わずかに内傾する。外器面はタタキ調整の後、ハケ目調整を行う。口径24.4cm（復元）を測る。11は外器面にナデ調整、内面にはヘラケズリを行う。器高9.8cmを測る。12は外器面にハケ目調整、内器面にハケ目調整の後ナデ調整を行う。口径12.6cmを測る。

図17は甕及び須恵器等の古墳時代以降の遺物を示している。１・２は口縁部片で、２は内器面に横方向、外器面には縦方向のハケ目調整を行っている。３は口縁端部に円形のスタンプ文を施す。内・外器面ともハケ目調整を行う。４～６は口縁部片である。５は口縁端部がわずかに内傾する。５・６ともに内・外器面ともハケ目調整を行う。４は口径19.6cm（復元）、５は口径23.5cm（復元）、６は口径26.5cm（復元）を測る。７は全形の分かる資料である。外器面にはハケ目調整、内器面は横方向のケズリ施した後、ナデ調整を行っている。口径12.8cm、器高28.5cm、胴部最大径22.8cmを測る。８は底～胴部片である。外器面は上半がタタキ、過半にはハケ目調整を行っている。胴部最大径24.9cmを測る。９は須恵器杯身口縁部片である。10～12は蓋である。10・11・12は口径それぞれ10.1cm、10.1cm（復元）、14.8cm（復元）を測る。14は瓶胴部である。肩部に沈線を２条巡らし、その下には刺突文を施す。13・15～17は高台を付す椀の底部である。13は底面にヘラ記号を有する。18は甕の口縁部である。口径14.3cmを測る。19は壷類の底部であろう。高台を付しており、その径は10.4cmを測る。20・21は土師皿である。底部はヘラ切りによる。

III区包含層（図18・19）

図18では二重口縁壷（１）、高杯（２～７）、鉢（８）、台付鉢（９）、器台（10）、壷（11）を示す。１は摩耗が激しく、調整は不明。２は杯部中央でわずかに屈曲する。外器面にはハケメ調整を施す。内器面の調整は不明。口径27.6cmを測る。高杯には、短い脚を有するもの（３・４）と長い脚を有するもの（５～７）がある。４は円孔を施す。基部径3.2cmを測る。５～７は外器面にヘラミガキを施す。６には円孔が認められる。８はユビオサエによる痕跡がはっきりと残る。口径10.2cm、器高4.4cmを測る。９はほぼ完形品である。外器面にはハケ目調整、内器面にはヘラミガキを行う。口径13.8cm、

器高6.2㎝、底径㎝を測る。10は底部片である。内・外器面ともケズリ調整を行う。底径12.2㎝を測る。11は頸部下と胴部の下方に太い突帯を巡らす。内・外器面ともハケ目調整を行う。口径25.4㎝、頸部径18.8㎝を測る。

図19は壷・甕及び須恵器を示した。１～３は甕口縁部片で、３は端面に刺突文を施す。４～６は口縁部である。４は頸部に突帯を巡らしており、口径29.2㎝を測る。６は口頸部がわずかに内湾する。外器面はハケ目調整、内器面はヘラケズリを施す。７・８は壷胴～頸部で内・外面共にハケ目調整を施す。８は頸部に突帯を巡らしている。９～11は底部で、凸レンズ状を呈するもの（９・10）と平底のもの（11）がある。12は須恵器杯蓋である。13・14は須恵器杯身である。13は口径12.6㎝を測る。15は台付椀で、口径12.6㎝を測る。16は高杯の脚部片である。中央に１条の太い沈線を巡らす。外器面にはカキメ調整を行う。17は平瓶である。外器面にはカキメ調整を行う。18は土師椀。

Ⅳ区包含層（図20）

１・２は椀である。１は全面にユビオサエの痕跡が残る。口径10.8㎝、器高4.2㎝を測る。２は口縁端部がわずかに段をなす。外器面にはナデ、内器面にはハケ目調整を行う。口径19.2㎝（復元）、器高7.5㎝を測る。３は台付椀である。口径13.5㎝、器高7.3㎝を測る。４は高杯である。外器面には縦方向のヘラケズリを施す。基部径は7.0㎝を測る。５・６は甕である。内・外器面にはハケメ調整を行う。５は口縁部が大きく開き、胴部最大径を超えている。７は壷等の底部。外器面上半にはカキ目調整を行う。８は高杯脚部である。中央には２条の沈線が巡る。９は壷口縁部である。内・外器面にはハケ目調整を行う。口径13.4㎝を測る。10・11・12は甕口縁部である。10・11は内・外器面にはハケ目調整を行う。12は頸部に凸帯を付し、その上に刺突文を施す。

尚、図21には各包含層より出土した石器を図示した。１は石核である。石材は黒曜石。２は石包丁、３は磨製石斧のそれぞれの破片である。

Ⅳ　まとめ

遺構、土層の把握が十分とは言い難い調査となってしまったが、ここに成果を記し、まとめとしたい。まず、各遺構の時期について。竪穴住居２は出土遺物により、古墳時代後期末葉に位置づけることができるだろう。判断材料に乏しいが、竪穴住居３もほぼ等しい時期に位置づけられるのではないだろうか。竪穴住居１も出土遺物に恵まれないが、過去の第３次調査におけるＳＣ10・11・13の所見を参考にすれば、古墳時代前期前半に位置づけることができるだろう。Ⅱ区のピットは埋土の違いにより、３つに区分できることを述べたが、埋土Ａのピットは、埋土が類似する土坑１の例を考えれば奈良時代頃、そして埋土Ｂは竪穴住居１埋土との共通性から弥生時代終末～古墳時代前期頃、そして埋土Ｃのピットは竪穴住居２の例から、古墳時代後期頃に位置づけることが適当だろう。

隣接した場所での調査にもかかわらず、今回の調査で検出した遺構と第３次調査時の遺構との対応関係を明らかにすることができなかった。いずれも小規模発掘であったこともあるが、遺構面の設定をうまく対応させることができなかったことが最大の原因といえるだろう。包含層から出土した遺物は主に弥生時代後期～奈良時代にかけてのものであるが、今回の調査では弥生時代、そして第３次調査において多くの遺構が検出されている中世期に相当する遺構の状況を明らかにすることができなかった。遺跡の状況が次第に明らかとなっている現在、各時期ごとにおける遺構の状況把握が、今後の課題といえるだろう。

図　　版

図版１

Ⅰ区全景（西から）

Ⅱ区上面全景（西から）

Ⅱ区下面全景（西から）

Ⅲ区全景（西から）

Ⅳ区東側（東から）

Ⅳ区西側（西から）

図版３

竪穴住居１（北東から）

竪穴住居２（北西から）

竪穴住居３（南から）

溝１（北から）

土坑２（北から）

Ⅱ区遺物出土状況
（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	はねどばるＣいせきぐんⅣ
書　　名	羽根戸原Ｃ遺跡群Ⅳ
副　書　名	羽根戸原Ｃ遺跡第５次調査
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第８１７集
編著者名	藏冨士　寛
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒８１０-８６２１　福岡県福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	２００４年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯 °′″	東緯 °′″	調査機関	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はねどばる 羽根戸原C遺跡 第5次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくはねど 西区羽根戸 576－3ほか	401305		33° 32′ 44″	130° 18′ 41″	2001 11 19 ～ 2002 01 11	１８７㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽根戸原C遺跡 第5次	集落	古墳時代	竪穴住居３ 土　坑　1	土師器・須恵器	
		奈良時代	土　坑　1 溝　　2	土師器・須恵器	

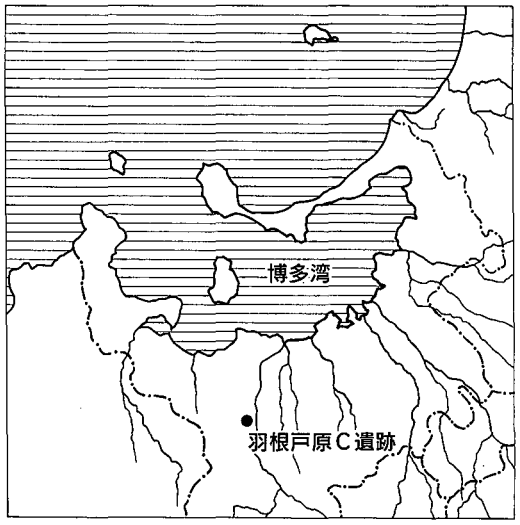
羽根戸原Ｃ遺跡群 Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第817集

2004年（平成16年）3月31日

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印　　刷　株式会社 チューエツ
福岡市博多区東比恵2-9-1



遺跡番号　HNC-5
調査番号　0138

羽根戸原C遺跡群Ⅳ
羽根戸原C遺跡第5次調査
福岡市埋蔵文化財調査報告書第817集
2004
福岡市教育委員会